

‘長い’ 複合名詞のリズムとアクセント

——韻律音韻論からの考察——

稲葉生一郎*

キーワード: 複合名詞, アクセント, モーラ, 音節, フット

要 旨

モーラ(拍)単位を基本にした先行研究は、複合名詞(N1・N2)を‘短い’複合名詞(N2≤二拍)と‘長い’複合名詞(N2≥三拍)に大別し、‘短い’複合名詞のアクセント型は予測が難しく、‘長い’複合名詞のアクセント型は、複合前のN2のアクセント核位置が分かれば、ある程度予測可能だと指摘している。

本稿は、先行研究でN2のアクセント核位置が分かれば、アクセント型の予測が可能だと指摘されている‘長い’複合名詞に焦点をあてた。そしてNHK発音アクセント辞典(1998)から、‘長い’複合名詞を抜粋して、N2のアクセント核の位置と全体のアクセント型との関係を韻律音韻論の視点から考察した。

その結果‘長い’複合名詞は、さらに三拍≤N2≤四拍と、N2≥五拍に区別されることが明らかになった。また、今回のフット(音歩)単位を基本にした研究で、‘長い’複合名詞全体のアクセント型が、複合前のN2のアクセント核位置に関係なく、単にN2の韻律的長さに従って比較的簡単に予測できることが判った。これにより日本語学習者のアクセント核位置に対する記憶負担は大きく軽減されることになる。

1. はじめに

東京方言は、語のアクセント核の位置が分かれば、語全体のアクセント型が分かる。つまり語のアクセント核の位置とは、語最後の高ピッチモーラの位置で、中高型と平板(または、尾高)型の場合、その最後の高ピッチモーラより前方は、第1モーラ以外高ピッチモーラが続き、一方最後の高ピッチモーラより後方は、低ピッチモーラが続く。そこで、第1モーラにアクセント核がある頭高型の場合、その語頭の高ピッチモーラより後方は、低ピッチモーラが続く。一語内で一

* INABA Seiichiro: カリフォルニア州立大学サンノゼ校助教授。

本研究の一部は、平成13年度科学研究費補助金「基盤研究(B)(1): (課題番号12558019) 発音自動評価機能付きインターネット型日本語音声言語教育システムの国際運用と評価研究(代表者: 岩手大学・三輪譲二氏); <http://sp.cis.iwate-u.ac.jp/sp/lesson/j/index.html>」によった。

度下降したピッチが再び上昇することはない。つまり一度下降したピッチが上昇した時は、二語目の存在を意味することになる。(アクセント核を「^ˈ」で示す。)

頭高型	中高型	平板(尾高)型
$\mu^{\text{ˈ}} \mu \mu$	$\mu \mu^{\text{ˈ}} \mu \mu$	$\mu \mu \mu \mu \mu^{\text{ˈ}}$
高 低 低	低 高 高 低 低	低 高 高 高 高

そこで日本語学習者は、語のアクセント核位置を知ることによって語のアクセント型を上記の様に予測できる。以上を踏まえた上で、本稿では複合名詞のアクセント型について議論する。

複合名詞(N1・N2)は、前部要素(N1)と後部要素(N2)が複合して形成されるが、通常二語扱いに成らず複合名詞全体でアクセント核が一つだけ存在する¹⁾。そこでそのアクセント核の位置が分かれば複合名詞全体のアクセント型が予測できる。もしアクセント核位置も予測可能になれば学習者の記憶負担は大きく軽減されることになる。しかし、先行研究はそれぞれ違いがあるものの、日本語学習者が利用し易いアクセント規則とは言い難い。そこで本稿では、日本語学習者が利用できる様な‘長い’複合名詞のアクセント規則を韻律論の視点から提示し、さらにその規則に基づくアクセント指導について考える。

2. 複合名詞に関する先行研究

先行研究(McCawley 1977, Higurashi 1983, Tsujimura and Davis 1987, 佐藤 1989, Poser 1990, 秋永 2001)は、下記に示す様に、複合名詞(N1・N2)を後部要素(N2)が二拍(モーラ)以下の‘短い’複合名詞と三拍以上の‘長い’複合名詞に大別している。

‘短い’複合名詞

- | | |
|---|------------------------------|
| 1. て ^ˈ んき+ず | → てんき ^ˈ ず(天気図) |
| 2. そ ^ˈ うむ+か ^ˈ | → そうむか ^ˈ (総務課) |
| 3. ネ ^ˈ バダ+しゅ ^ˈ う | → ネバダ ^ˈ しゅう(州) |
| 4. にゅ ^ˈ うどう+く ^ˈ も | → にゅうどうぐ ^ˈ も(入道雲) |

‘長い’複合名詞

- | | |
|--|-------------------------------|
| 1. め ^ˈ +くすり | → めぐ ^ˈ すり(目薬) |
| 2. な ^ˈ ま+たま ^ˈ ご | → なまた ^ˈ まご(生卵) |
| 3. こうつう+いはん | → こうつうい ^ˈ はん(交通違反) |
| 4. で ^ˈ んき+かみそり ^ˈ | → でんきか ^ˈ みそり(電気剃刀) |

¹⁾ 役職を表す名詞(例: プ^ˈッシュだいと^ˈうりょう)や対立・並立型名詞(例: め^ˈはな)などの様に、N1が独立性を失わず音韻的に複合化しない複合名詞も存在する。

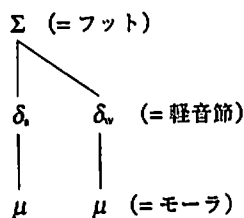
5. い¹せ+ものが¹たり → いせものが¹たり (伊勢物語)
6. ワ¹ード+プロセ¹ッサー → ワードプロセ¹ッサー
7. ぜんだま+コレステロ¹ール → ぜんだまコレステロ¹ール (善玉)

先行研究の指摘には、それぞれ多少の違いはある。しかし、総じて‘短い’複合名詞のアクセント型は、N2 個々の音韻情報によって異なるため予測が難しく、一方‘長い’複合名詞のアクセント型は、後部要素のアクセント核の位置が分かれば、ある程度予測可能であると指摘している。例えば、Tsujiura and Davis (1987) は、‘長い’複合名詞に関して、複合前に N2 の最終拍(モーラ)と語尾から二番目の拍にアクセント核がある時、そして N2 が無核(平板型)の時、複合後は N2 の第一拍にアクセント核が置かれ、複合前に N2 のその他の拍(例えば、語尾から三番目、あるいは四番目の拍)にアクセント核がある時は、そのアクセント核が保存されると指摘している。本稿は、アクセント型が予測可能と考えられている‘長い’複合名詞に焦点を絞り、NHK 発音アクセント辞典(付録)から抜粋した‘長い’複合名詞のアクセント型を韻律論の視点から考察する。そこで、まず韻律論の基礎概念について述べる。

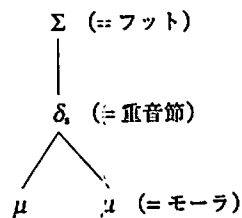
3. 韻律音韻論 (Metrical Phonology)

Hayes (1995) は、三種類のリズム型を提唱している。その中の一つ、モーラ強弱リズム型 (Moraic Trochees) には、次の二種類がある。

a. 2 軽音節上に形成されるフット



b. 1 重音節上に形成されるフット



ミュー (μ) はモーラ、小文字のシグマ (δ) は音節、大文字のシグマ (Σ) はフットを表す。さらに、‘s’ と ‘w’ は、強・弱リズムを示す。音節の下位範疇であるモーラは音節の質量(軽・重)を表す。つまり (a) に示す様に、軽音節は 1 モーラで形成され、(b) に示す様に、重音節は 2 モーラで形成される。換言すると、フットは二つの軽音節上、あるいは一つの重音節上に構築される。(本稿では、これらのフット型を二拍フットとよぶ。) Hayes (1995) は、リズム形態解析のため、下記に示す様な簡略した図式を提示している。

a. (x .)

b. (x)

上記の‘・’と‘-’は、それぞれ軽音節と重音節を示す。また、丸括弧はフットを示し、丸括弧内の‘x’はフット核、‘・’は非フット核を示す。1フットは二つの軽音節上、あるいは一つの重音節上に構築されることを意味している。さらに、Hayes (1995) は、韻律外性 (Extrametricity) という概念を提唱している。この概念によって末端単位はリズム構築から無視され得る。さらに、エンドルール (End Rule) の適用によって、主アクセント位置を予測できる。つまり、言語の主アクセントは、左右いずれかの末端フット核上にあると考えられていて、エンドルールは、文字通り左右の末端(エンド)フット核上に X グリッドを置く。例えば、下記 (a) に示す様に、まず複数の軽音節上にフット(モーラ強弱リズム型)がドメイン末尾から左に向かって構築される。そして、右エンドルール (End Rule, lRight) により、X グリッドが最右端フット核上に置かれる。このグリッドが、ドメインの主アクセント位置を示す。一方、下記 (b) に示す様に末尾音節が韻律外性の時、この末尾音節はリズム構築から無視され、リズム構築は末尾から二番目の音節から始まる。その後右エンドルール (End Rule, Right) により X グリッドが最右端フット核上に置かれ、ドメインの主アクセント位置を示す。韻律外性として、リズム構築から無視される単位を‘< >’、そして末尾(語境界)を‘#’で示す。

- a.
- | | | |
|-------------------|---|-------------------|
| (x .) (x .) (x .) | | x |
| ... δ δ δ δ δ δ # | ⇒ | (x .) (x .) (x .) |
| | | ... δ δ δ i δ δ # |
- b.
- | | | |
|---------------------|---|---------------------|
| (x .) (x .) | | x |
| ... δ δ δ δ δ <δ> # | ⇒ | (x .) (x .) |
| | | ... δ δ δ i δ <δ> # |

4. 韻律論から見た‘長い’複合名詞 (N1 + N2) のリズムとアクセント

4-1. N2 が三拍の複合名詞

‘長い’複合名詞の N2 を NHK 発音アクセント辞典(付録)から抜粋して、アクセント型を考察した。その結果、N2 が三拍の複合名詞には、ある特徴があることが判った。つまり重音節に先行する軽音節にアクセント核が存在する。この意味を考察してみよう。

下記に示す N2 ([軽][重]音節)は、[重][軽]音節構造(例: C○漢字, ○○会議), あるいは[軽][軽][軽]音節構造(例: ○○油, ○○意識)から成るものと同じ様に N2 の第一音節にアクセント核がある。

○○委員, 違反, 家業, 加減, 加工, 火山, 課税, 議員, 機械, 議会, 機関, 企業, 機嫌, 記号, 基準, 漁業, 漁船, 具合, 供養, 化粧, 呼吸, 砂糖, 作用, 試合, 次官, 時間, 事業, 試験, 資産, 市場, 事情, 地震, 思想, 次第, 事柄, 時代, 辞典, 資本, 自慢, 社会, 写真, 茶わん, 手段, 橋梓, 需要,

所帯, 処分, ずきん, 住まい, 相撲, 訴訟, 打者, 地帯, 地方, 貯金, 値段, 飛行, 肥料, 比例, 歩合, 符号, 普請, 婦人, 部隊, 舞台, 布団, 舞踊, 保険, 保証, 補償, ボタン, 見舞い, 模様, 野球, 預金, 予算

日本語のフットは, 一重音節上, あるいは二軽音節上に構築される。そこで, N2 が[重][軽]音節, あるいは[軽][軽][軽]音節から成る場合, ([重¹])[軽], ([軽¹])[軽])[軽]の様に, 最初のフット核にアクセント核が置かれるのは, 一般的で予測し易い。しかし, N2 が[軽][重]音節構造をしている場合, その重音節にまず二拍フットを形成すると, [軽]([重])の様に成り, アクセント核が置かれるはずの[軽]音節は, 二拍フットを形成できずに孤立することになる。つまり日本語のフットは, 二拍(モーラ)から成ると考えられる (Poser 1990) が, 韻律論の音節分割禁止という規制 (Syllable Integrity) に従うと, 重音節を分割して二拍フットを構築できない。例えば, 「コレステロール」を「ko(resu)(tero)(oru)», 「加工」を「(kako)o」の様に, 重音節を分割して, フットを構築することはできない。そこで上記に示す N2 は, 次の様なフット構造だと考えられる。

- | | |
|-------------------------|------------------------|
| a. 「○○委員」→ ○○(i)(iN) | d. 「○○加減」→ ○○(ka)(geN) |
| b. 「○○違反」→ ○○(i)(haN) | e. 「○○加工」→ ○○(ka)(koo) |
| c. 「○○家業」→ ○○(ka)(gyoo) | f. 「○○火山」→ ○○(ka)(zaN) |

N2 の第一音節は, 二拍フットを構築できない単拍フット (Degenerate Foot) と呼ばれる。Hayes (1995) は, 単拍フットの禁止を提言しているが, 単拍フット核に主アクセントがある時のみ, 単拍フットを認めるとしている (Weak Prohibition)²。仮に, 二拍フットが N2 (ドメイン) の頭から右に構築されたとすると, 音節分割禁止規制 (Syllable Integrity) に抵触する。また, 仮に, 二拍フットが N2 の末尾から左に構築されたとすると, 単拍フットにアクセント核がある事実をうまく説明できない。そこで, 本研究者は, Van der Hulst (1984) の帰納的方法論に従い, フットが構築されるを考える。つまり, 通常主アクセント位置はフット構築後に決定されるが, Van der Hulst は, 主アクセント位置からフットを構築する方法 (top-down construction) を提言している。この帰納的方法論は, フット構造から主アクセントを知る通常の演繹的方法論とは異なるが, N2 が三拍の複合名詞の多くは, N2 の第一音節にアクセント核が置かれる(確定事実)ため, フット構造を知る上で有効な方法論であり, N2 が三拍の複合名詞のフットとアクセント核の関係を説明できる。

一方で, N2 が三拍の複合語の中で, N2 の第一音節にアクセント核が置かれられないものが, 下記の様に見られる。

² Hayes (1995) は, ‘Degenerate Feet’ を完全に規制する ‘Strong Prohibition’ と一部認める ‘Weak Prohibition’ を提言している。

- | | |
|---------------------------|---------------------------|
| a. ○○きか ^ん (期間) | d. ○○ふく ^し (福祉) |
| b. ○○しき ^ん (資金) | e. ○○こそ ^う (小僧) |
| c. ○○きそ ^く (規則) | |

上記 (a), (b), (c), (d) の N2 要素の第一音節は、無声子音に挟まれた高(狭)母音が存在し、その母音は無声化する傾向がある。東京方言は、無声化した母音にアクセント核が置かれる時、アクセント核の移動が起きる。例えば N2 が「県」の時アクセント核は N1 の最終音節に置かれる。

- | | |
|----------------------|-----------------------|
| a. さが ^{けん} | c. かながわ ^{けん} |
| b. いわて ^{けん} | d. ふくおか ^{けん} |

ところが、アクセント核がおかれるはずの N1 の最終音節の高母音が無声子音で挟まれ無声化する時、アクセント核が移動する。(無声化した高母音を含む音節を下線で示す。)

- | | |
|--------------------------------|--------------------------------|
| a. やまぐ ^ち <u>け</u> ん | c. やまな ^し <u>け</u> ん |
| b. みやざ ^き <u>け</u> ん | d. ながさ ^き <u>け</u> ん |

つまり N2 が三拍の複合語の場合、アクセント核が N2 の第一音節に置かれるという規則は、「期間」の様なアクセント核が N2 の第一音節に置かれないものにも、まず適用されると言える。その後、アクセント核が右(ドメイン内のリズム構築方向)に移動したと考えられる。

一方、例外「○○小僧」が存在する。「○○小僧」の N2 の第一音節母音は無声化する環境にないが、アクセント核が N2 の第二音節にある。しかし、「小僧」は、「小」と「僧」の複合名詞であると考えられるので、N2 が三拍の複合名詞に含まれるべきではない。N2 が二拍以下の平板型複合名詞、「こ+うし→こうし」(子牛)、「こ+えだ→こえだ」(小枝)、「こ+あ^じ→こあじ」(子鯰)などが存在するが、「こ+そ^う→こそ^う」は「こ+ね^こ→こね^こ」に順ずるアクセント型と言える。この様な例を「短い」複合名詞として除き韻律論の立場からまとめると、N2 が三拍の複合名詞のアクセント型は、次の様に一般化できる。

N2 = 三拍の複合名詞: アクセント核は、N2 の第一フット核に置かれる。

4-2. N2 が四拍の複合名詞

次に、四拍の N2 を NHK 発音アクセント辞典(付録)から抜粋して、アクセント型を考察した。抜粋した N2 の多くは、アクセント核が第一音節にある。また N2 は、次の五種類の音節構造から成ることが分かった。

- | | |
|------------------------------|------------------------------|
| a. ○○[重 ^ん][重] | :(例: ○○案内, ○○演習, ○○往生, ○○外交) |
| b. ○○[重 ^ん][軽][軽] | :(例: ○○演説, ○○音楽, ○○改革, ○○監督) |

- c. ○○[軽¹][軽][重] (例: ○○活動, ○○国民, ○○撮影, ○○責任)
 d. ○○[軽¹][軽][軽][軽] (例: ○○剃刀, ○○友達, ○○羽二重, ○○約束)
 e. ○○[軽¹][重][軽] (例: ○○ロケット)

上記(e)に示す様に、重音節に先行する軽音節にアクセント核がある。つまり、N2が三拍の複合名詞の様に単拍フットが存在する。また、N2が三拍の複合名詞の様に、NHKのアクセント辞典(付録)にあるN2が四拍の多くの複合名詞のアクセント核は、N2の第一音節に存在し、予測可能であると言える。しかしその中に、N2のアクセント型を保存するものとして、下記に示す様な複合名詞も記載されている。

- a. ○○きゅうす¹う(級数), じんぐ¹う(神宮)
 b. ○○さく¹もつ(作物), しょく¹ぶつ(植物), としょ¹かん(図書館), りき¹がく(力学), わか¹しゅう
 (和歌集)

ところが、複合名詞を構成するこれらのN2は、さらに小さい要素から構成されている。つまり、これらのN2は、独立した要素ではなく、第三要素を含む複合名詞と考えられる。これらの複合名詞を構成する第三要素、「数」、「宮」、「物」、「館」、「学」、「集」が複合名詞全体のアクセント型を決定する。つまり上記(a)の丸括弧内の複合名詞は、アクセント核が後部要素の第一音節に置かれる型で、上記(b)の丸括弧内の複合名詞はアクセント核が前部要素の最終音節に置かれる型ということになる。先行研究で、アクセント型を保存する複合名詞として扱われているが、実はN2が二拍以下の‘短い’複合名詞だったことになる。そこで、この様なN2が四拍として従来扱われてきた複合名詞を除くと、N2が四拍から成る複合名詞は、後部要素の第一フット核にアクセント核が置かれると一般化できる。

しかしながら、N2が四拍から成る複合名詞の中に、N2のアクセント型を保存する複合名詞が存在する(窪田 et al. 1997)。例えば、「大和撫子」がこの型になる。

や¹まと+なで¹しこ → やまと・なで¹しこ(大和撫子)

しかし、この語のアクセント型は、今回のNHK発音アクセント辞典から抜粋したN2が四拍の複合名詞(前述したN2が二拍以下として扱われるべき複合名詞を除く)の中では、非主流であると言える。つまり、アクセント辞典に記載されていて、「撫子」の様にN2が[軽][軽][軽]音節で構成される複合名詞は、下記に示す様に、N2の第一音節にアクセント核が置かれている。

N2が四軽音節から成る複合名詞

- a. で¹んき+かみそり¹ → でんき・か¹みそり(電気剃刀)
 b. あそび+ともだち → あそび・と¹もだち(遊び友達)
 c. く¹ろ+は¹ぶたえ → くろ・は¹ぶたえ(黒羽二重)

d. くち+やくそく → :くち・や[゛]くそく (口約束)

そこで、N2 が四拍でアクセント型を保存する複合名詞(例: 大和なで[゛]しこ)を非主流として扱うと、N2 が四拍の複合語のアクセント型は、韻律論の立場から次の様に一般化できる。

N2 = 四拍の複合名詞: アクセント核は、N2 の第一フット核に置かれる。

つまり N2 が四拍の複合名詞は、三拍の複合名詞と同じ範疇に属するものと言える。

4-3. N2 が五拍以上の複合名詞

NHK 発音アクセント辞典に、N2 が五拍以上の複合名詞の記載は非常に少ない(記載複合名詞: ○○司令官, ○○心理学, ○○顕微鏡, ○○探検隊, 等)。この種の複合名詞は、先行研究で、後部要素のアクセント保存型と言われてきた。しかしこれらの中には、アクセント型を決定する第三要素を含むものがある。例えば下記に示す様に、三要素 (N1・N2・N3) が複合する時、アクセント型は、N3 の音韻構造で決定される。

しゃ[゛]かい → しゃかいしゅ[゛]ぎ → しゃかいしゅぎか[゛]くめい(社会主義革命)

つまり、「艦隊・司令[゛]・官」の N3 にあたる「官」や「児童・心理[゛]・学」の N3 にあたる「学」が、アクセント型を決定する要素であり、「司令・官」や「心理・学」は、複合名詞と扱われるべきものである。「官」や「学」は、NHK 発音アクセント辞典に、前部要素の最終音節にアクセント核を置く複合名詞のグループとして記載されている。また「電子・顕微・鏡」の「鏡」、「南極・探検・隊」の「隊」は、平板化する複合名詞のグループに含まれている。確かに意味上では、「艦隊司令官」は、(N1)・(N2・N3) であるが、音韻的には、(N1・N2)・(N3) に成り、意味的分割と音韻的分割には開きがあるので、アクセント型を分析する時注意を要する。これらの複合名詞を除いて、N2 が五拍以上の複合名詞のアクセント核位置が予測可能であるか考察した。N2 が五拍以上の複合名詞の可能な音節構造を列挙するのは紙面の制限上不可能なので N2 が五拍の複合名詞の可能な音節構造を次に示す。

N2 が五拍の複合名詞の音節構造

- | | |
|------------------------------------|-----------------------------|
| a. ○○[重 [゛]][軽][重] | 例: 「○○イ [゛] ンディアン」 |
| b. ○○[重][重 [゛]][軽] | 例: 「○○ハイラ [゛] イト」 |
| c. ○○[軽][軽][軽 [゛]][軽][軽] | 例: 「○○ほとと [゛] ぎす」 |
| d. ○○[軽][重 [゛]][重] | 例: 「○○カレ [゛] ンダー」 |
| e. ○○[軽][軽 [゛]][軽][重] | 例: 「○○アレ [゛] ルギー」 |
| f. ○○[軽][重 [゛]][軽][軽] | 例: 「○○コマ [゛] ーシャル」 |
| g. ○○[軽][軽][重 [゛]][軽] | 例: 「○○カプチ [゛] ー」 |
| h. ○○[重][軽 [゛]][軽][軽] | 例: 「○○ヨーグ [゛] ルト」 |

N2 が三拍、四拍の時の様な語頭の単拍フットの存在は確認されない。また、上記の様な位置にアクセント核を置くためには、次の様な韻律規則があると考ええる。

規則 (N2 ≥ 五拍)

- a. 語尾の音節は、韻律外性単位として、韻律構造から無視する。
- b. 重音節上に、二拍フットを形成する。
- c. 左に向かって、二軽音節上に、二拍フットを形成する。
- d. アクセント核を、最終フット核上に置く。

上記規則を下記の N2 (ドメイン) に適用すると下記の様にフットが構築される。

N2 が五拍以上の複合名詞のフット

- a. ○○物語: → ○○(もの)(が¹た)〈り〉
- b. ○○不如帰: → ○○(ほと)(と¹ぎ)〈す〉
- c. ○○コレステロール: → ○○コ(レス)テ(ロ¹ー)〈ル〉
- d. ○○プロセッサー: → ○○(プロ)(セ¹ッ)〈サー〉
- e. ○○インディアン: → ○○(イ¹ン)ディ〈アン〉

上記の「コレステロール」を例にとって説明する。まず、語尾の音節は、韻律外性単位として、韻律構造から無視される: コレステロー〈ル〉。次に、重音節上に二拍フットを形成する: コレステ(ロー)〈ル〉。そして、左に向かって、二軽音節上に二拍フットを形成する: コレ(ステ)(ロー)〈ル〉。しかし、「ス」は、無声子音に挟まれた高母音のため、一音節分左に移動し、二拍フットを新たな二軽音節上に形成する: コ(レス)テ(ロー)〈ル〉¹。そして、最右端の二拍フット核上にアクセント核が置かれる: コ(レス)テ(ロ¹ー)〈ル〉¹。この予測されたアクセント核の位置と実際のアクセント核の位置は、上記の他の複合名詞も含め完全に一致する。つまり規則により三拍・四拍の複合名詞と同様五拍以上の複合名詞もある程度(平板型や頭高型の複合名詞も存在する)予測可能だと言える。一方フット構築過程は N2 が三拍・四拍の複合名詞と比べると大きく異なることが明らかになった。

5. ‘長い’ 複合名詞のアクセント指導

先行研究でも議論されてきた様に、今回のフットを基礎にした研究からも、N2 が三拍以上の複合名詞のアクセント核位置は、ある程度予測可能であることが判った。さらに今回の研究では、N2 が三拍、四拍の複合名詞のアクセント核位置は、N2 の音韻構造に関係なく、第一フット核に

¹ 二拍フットを構築できない音節は、浮遊音節 (Stray Syllables) と呼ばれ、その後存在する前後いずれかの二拍フットに取り込まれると考えられるが、ここではその議論を割愛する。

置かれると単純明解に一般化することができた。

N2 = 三拍

〇〇 + 漢字	→	〇〇(か ^ん)じ	〇〇 + 会議	→	〇〇(か ^い)ぎ
〇〇 + 油	→	〇〇(あ ^ぶ)ら	〇〇 + 意識	→	〇〇(い ^し)き
〇〇 + 委員	→	〇〇(い ^い)いん	〇〇 + 違反	→	〇〇(い ^い)はん

N2 = 四拍

〇〇 + 案内	→	〇〇(あ ^ん)ない	〇〇 + 演習	→	〇〇(え ^ん)しゅう
〇〇 + 演説	→	〇〇(え ^ん)ぜつ	〇〇 + 音楽	→	〇〇(お ^ん)がく
〇〇 + 活動	→	〇〇(か ^つ)どう	〇〇 + 国民	→	〇〇(こ ^く)みん
〇〇 + 剃刀	→	〇〇(か ^み)そり	〇〇 + 友達	→	〇〇(と ^も)だち
〇〇 + ロケット	→	〇〇(ロ ^く)ケット			

日本語学習者には、N2が三拍、四拍の複合名詞は、N2の第一音節にアクセント核が置かれると説明する方が、N2の第一フット核にアクセント核が置かれると説明するより分かり易いかもしれない。また、この時「大和撫子」は、例外であることを説明しておく方が良いと考える。さらに先行研究では、〇〇きゅうす^う(級数)、〇〇じんぐ^う(神宮)、〇〇さく^{もつ}(作物)、〇〇しょく^{ぶつ}(植物)、〇〇としょ^{かん}(図書館)、〇〇りき^{がく}(力学)、〇〇わか^{しゅう}(和歌集)などは、四拍の複合語として扱われてきたが、これらの複合名詞は、本稿で議論した様に、N2が二拍の「短い」複合名詞の範囲に入るもので、N2が四拍の「長い」複合名詞とは、はっきり区別して教えるべきだと考える。

一方、N2が五拍以上の複合名詞のアクセント核も、ある程度予測可能であるが、学習者にそれを理解させるのは残念ながら容易ではない。しかし幸いN2が五拍以上の複合名詞の数は多くない。また、N2が五拍以上の複合名詞のアクセント型は、外来語のデフォルト(default)アクセント型と一致するので、外来語のアクセント型の練習(稲葉 1999)で補うことができると考える。また先行研究では、N2が五拍以上の複合名詞として扱われてきた「艦隊・司令^官」、「児童・心理^学」、平板型の「電子・顕微・鏡」、「南極・探検・隊」などは、N2が五拍以上の複合名詞として扱われるべきではなく、これらの複合名詞も、はっきり区別して教えるべきだと考える。

6. まとめと今後の課題

先行研究で、「長い」複合名詞(N2≧三拍)として扱われてきたものは、三拍≦N2≦四拍とN2≧五拍に区別されることが明らかになった。換言すると、今回の研究でアクセント型は、四拍と

五拍を境に違いがあることが明確になった。また、先行研究において、‘長い’複合名詞は、N2のアクセント核位置が分からないと、複合名詞全体のアクセント型が予測できないとされてきたが、今回の研究で、‘長い’複合名詞のN2のアクセント核位置が分からなくても、N2の音韻的長さに従って、全体のアクセント型が比較的簡単に予測できるようになった。これにより日本語学習者の記憶負担は大きく軽減されることになる。

今回の研究では学習者が活用できるアクセント理論の構築を目指して、大局を見ることに焦点をおいた結果、非主流型として扱った複合名詞もある。例えば、N2が四拍の「やまと・なでしこ」が存在する。また五拍以上で平板(無核)型「ニュー・カレドニア」や頭高型「ニュー・イングランド」などの複合名詞も非主流型として扱った。

複合名詞はN1とN2が複合してできるという性質上、N1とN2の結合度合いで、N2のアクセント型が保存されることも十分あり得るし、また原語のアクセント型がそのまま保存されることも考えられる。この様なアクセント型が保存される例が存在することは避けられない。そこで日本語学習者にとって、‘長い’複合名詞の基本になるアクセント型を学ぶ一方で、どの‘長い’複合名詞のアクセント型が‘例外’なのかをはっきり見極めることも大切だ。またアクセント型には、ある程度の‘ゆれ’(秋永 1999)が許容されるので、違ったアクセント型も許容され得ることを利用したアクセント指導も考えられる。そこで、‘ゆれ’の許容範囲に関して、韻律音韻論から見たアクセント型の総合的な研究は将来の課題としたい。

参 考 文 献

- 秋永一枝 (1999) 『東京弁アクセントの変貌』, 笠間書院。
 ——— (2001) 『東京アクセントの法則について』『新明解日本語アクセント辞典』, 三省堂。
 稲葉生一郎 (1999) 「韻律論と外来語を使ったリズム指導」アラム佐々木幸子編『言語学と日本語教育』, 95-112, くろしお出版。
 窪園晴夫・伊藤順子・Armin Mester (1997) 「音韻構造から見た語と句の境界」音声文法研究会編『文法と音声』, 147-166, くろしお出版。
 佐藤大和 (1989) 「複合語におけるアクセント規則と連濁規則」杉藤美代子編『日本語の音声・音韻(上)』, 233-265, 明治書院。
 NHK (編) (1998) 「複合名詞と発音とアクセント」NHK 放送文化研究所編『日本語発音アクセント辞典』付録, 30-62, 日本放送出版協会。
 Hayes, Bruce. 1995. *Metrical Stress Theory (Principles and Case Studies)*. Chicago: The University of Chicago Press.
 Higurashi, Yoshiko. 1983. *The accent of extended word structures on Tokyo Standard Japanese*. Tokyo: Educa Inc.
 McCawley, J.D. 1977. Accent in Japanese. In *Studies in stress and accent*, ed. L.M. Hyman, 261-302.
 Poser, J. William. 1990. Evidence for foot structure in Japanese. *Language* 66: 78-105.

Tsujimura, Natsuko and Stuart Davis. 1987. The accent of long nominal compounding in Tokyo Japanese. *Studies in Language* 11 (1): 199-217.

Van der Hulst, Harry. 1984. *Syllable Structure and Stress in Dutch*. Dordrecht: Foris.